



ラグビー班2年、3年の集合写真。前列右端が筆者、後列左から2人目が現・ラグビー班監督湯沢一道氏

その結果、10月の国体本番では、1回戦で愛媛県代表を破り（続く準決勝は埼玉代表に敗退）、長野県の総合優勝に貢献することができた。ちなみに翌年の宮崎国体も、長野県は合同チームで臨み、飯田高校からは、私と1年下の湯沢一道君（現・飯田高校ラグビー班監督）がメンバーとして選ばれ、合同練習や合宿

「ラグビー班花園出場記念」

楯円球とともにあった頃

藤本敏文（高32回）

昨年12月は、6年ぶり8度目の花園出場を果たした我が飯田高校を2回も応援に行く機会に恵まれた。そんな全国大会で躍動する後輩をうれしく思いつつ、私がかつて楯円球を追っていた頃を振り返ってみたい。

ラグビーと出会い、やまびこ国体に出場！

私が飯田高校に入学したのは今から40年以上前の昭和52（1977）年。中学時代はバスケットをしていたが、当時県下でも強豪で鳴らした錚々たる面々が同期で入学したため、バスケット班で活躍できる見込みもなく、剣道でもやってみようかと思っていた。

そんな時に緑ヶ丘中の2年先輩で兄の友人でもある田邊治樹さん（高30回）が夜中に家に押しかけて来て、ラグビーの素晴らしさを熱く語ってくれたことがラグビーとの出会いのきっかけだ。

出会いは作ってくれた。同時に、吉岡富士夫さん（高31回）、林浩司さん（高31回）も選出された。

オール長野は、OBの小島喜美雄先生（高25回）をはじめ当時の県下の主要な指導者の下、下農を中心に、飯田長姫（当時）、飯田工（当時）、伊那北の飯伊の高校から集められた。練習は主に土日に行われ、夏休み中の菅平を含む合宿も複数回行われた。当時、駒ヶ根―中津川間が開通していた中央自動車道を使って、名古屋方面の花園常連校（西陵商、関商工等）を中心に練習試合を何度も組んでもらうことで、相手の名前に臆することなく戦う度胸がついていったものだ。



●ふじもと・としふみ
飯田市松尾出身。気象大学卒業。現在は、気象庁にて地球温暖化対策関連の業務に従事。私生活では、50の手習いで始めたゴルフを苦戦しながらもエンジョイしている。

しかし、当時はやっていたテレビドラマ「われら青春」（1974年）のかっこよくトライする青春とは大きく異なり、スクラム、タックルなど泥と汗にまみれ、さらに集団格闘技的な要素も加えて、3K（臭い、汚い、危険）の代表スポーツだったため、入部者は多かったが去って行く者も多かった。確かに高校受験を終えたばかりの1年坊主にとっては、コートから端までボールを回しながら走る「ランパス」をはじめハードなものが多く、私の帰宅後の日課は、風呂、食事、仮眠、勉強、睡眠の繰り返しだった。また、練習後に唾液でボールを磨くのも結構きつい仕事だったと記憶している。

厳しい練習にもようやく慣れてきた1年生の正月明けに、長野国体（やまびこ国体）に向けた合同チーム（オール長野）のセレクションがあった。たまたま上背があった私はロックとして強化選手に選ばれたことが、新たな

に参加した。が、国体予選で山梨代表の日川高校に破れ、残念ながら国体連続出場は果たせなかった。

「夜明け前」ではあったけれど……

私が飯田高校を卒業した翌々年にテレビドラマ「スクールウォーズ」のモデルとなった伏見工業から同志社大に進んだ故・平尾誠二らが、松尾雄治を擁する新日鉄金石と日本選手権で名勝負を演じ、ラグビーブームが始まった。このブームの前、いわば「夜明け前」世代の私だが、目標に向かって仲間と一緒にボールを追いかけ、国内トップレベルの高校と対戦することができ、長野国体という運に恵まれたお陰でもあるが、そうした経験があつて今の自分があると言える。

現在の飯田高校の活躍の要因として、長野国体をきっかけにできた地域の少年ラグビークラブの存在もあると聞いている。期せずして私もそのきっかけを作った一員になれたと少々誇らしくも思っている。

ともに最後まで戦ったラグビー班同期の6人をはじめメンバー不足の際に助っ人を引き受けてくれた運動班長屋の面々など、多くの仲間にも恵まれた幸せな高校時代だった。この場を借りて感謝するとともに、母校ラグビー班の今後のさらなる飛躍を期待したい。